

たぶんかきょうせいしゃかいづくりすいしんじぎょうほうこくしょ
多文化共生社会づくり推進事業報告書

1 委託業務名・概要

- (1) 業務名 「外国人の子どもと親のための日本語学習支援事業」
(2) 概要（事業の要約・事業の目的など）

愛知教育大学のある刈谷市周辺には、自動車関連企業等で働く外国人が多く居住し、その子どもたちも地域の小中学校に多数在籍する。そうした地域住民の子どもとその保護者等を対象に、大学の日本語教育コース・教員養成課程の学部生および教育学研究科の大学院生が主体となって、日本語及び子どもの教科学習の支援と交流イベントを、大学の空き教室を使って実施した。

2 実施事業について

- (1) 実施時期 平成19年7月1日（日）～平成20年2月29日（金）
(2) 実施地域 刈谷市
(3) 事業の具体的内容

日本語教室の開催

10月に4回（6日、13日、20日、27日）、11月に3回（10日、17日、24日）、12月に4回（1日、8日、15日、22日）、1月に2回（12日、26日）の計13回の日本語教室を開催した。スタッフによる反省会を2月5日に実施した。教室は、毎回、土曜日の2時30分から4時までの90分開催した。

クラスはA～Eまでの大人クラス、主に小学生以上の子どもクラス、乳幼児の赤ちゃんクラスに分けて実施した。団体の従来からの活動に続いて、ブラジル人向けの雑誌に、紹介記事が載ったため、本事業に多数の学習希望者が集まった。大人クラス、子どもクラスともに大幅に在籍者数が増え、在籍者数は大人クラスが約70名、子どもクラスが約30名であった。学習者の国籍は大半がブラジルで、その他に現在は中国、ベトナム、インドネシア、ペルーの方が在籍している。40名の学生がスタッフとして活動に参加した。

【大人クラス】

大人クラスでは、『みんなの日本語初級』（スリーエーネットワーク）を使って授業を行った。A～Dクラスは『みんなの日本語初級』、Aクラス第1～5課、Bクラス第6～12課、Cクラス第13～18課、Dクラス第19～25課が半年間のだいたいの学習進度である。Eクラスは『みんなの日本語初級』を使用し、漢字の練習や作文も授業に取り入れた。市販のワークシートや絵カードだけでなく、学生の自作によるプリントや絵カードなども使用した。授業を担当する学生は、お昼休みや講義の合間を利用して教案を作り、土曜日の授業に臨んだ。

【子どもクラス】

小学生、中学生に加え、大人クラスで勉強する親が連れてくる乳幼児が多くなったため、子どもクラスに加え、新たに「赤ちゃんクラス」を設けた。子どもクラスでは学校の宿題を教えたり、一緒にゲームをしたりといった活動を行った。子どもクラスでも赤ちゃんクラスでも、まずは遊びながら日本語に触れ、楽しく学んでいくことを目指した。

交流イベントの開催

季節ごとにイベントも企画した。7月にシュハスコパーティー、10月にハロウィンパーティー、12月にクリスマスパーティー、1月に新年パーティーを開催した。

【本年度の交流イベントの開催】

- ・ シュハスコパーティー=7月21日(土) 参加人数: 約40名

大学の近くの公園でシュハスコというブラジル式パーベキューパーティーを行なった。台風接近という悪天候での開催だったが、外国人、日本人合わせて40名ほどの参加があった。スイカ割りをして、子どもも大人も盛り上がった。

- ・ ハロウィンパーティー=10月27日(土) 参加人数: 約30名

子どもクラスでハロウィンパーティーを開いた。みんなで衣装した後、「trick or treat!」と言って大人クラスの教室を回り、お菓子をもらった。また、子どもたちのお母さんから手作りケーキの差し入れもあり、子どもたちは大喜びだった。

- ・ クリスマスパーティー=12月22日(土) 参加人数: 約40名

学習者さんの手作りケーキを食べたり、プレゼント交換をしたりして交流を深めた。日本語教育コースの学生がサンタに扮して登場し、会場がとても盛り上がった。

- ・ 新年パーティー=1月12日(土) 参加人数: 約20名

新年明け最初の日本語教室ということで、皆で書初めや福笑いのゲームなどをした。筆を初めて握るといっても多く、子どもも大人も一緒に日本の伝統文化を楽しんだ。

ボランティア研修会の開催

ボランティア学生の技術向上のために11月に3回（10日、17日、24日）、12月に2回（1日、8日）の計5回、ボランティア研修会を開催した。講師は、大学教員及び大学院生が務めた。参加人数は、一回平均約15名であった。

3 実施結果（実施の効果等）

（1）日本語教室の開催

本事業には、スタッフとして40名の学生が参加した。学生は、外国人に対する日本語教育を専門に学ぶ者、教員養成課程で学ぶ者などさまざまであるが、会の運営等を主体的に進める中で、組織の運営の仕方、日本語の指導方法、異文化間コミュニケーションの方法など、活動を通してさまざまなことを学ぶことができた。

【大人クラス】

- ・通訳・コーディネーターとして活動に関わってくれるブラジル人女性の協力を得ることで、ポルトガル語で教室に関する説明が可能となり、日本語がほとんどできない人でも、教室に通うことができた。
- ・日本語のレベルアップだけでなく、普段の職場と違う雰囲気の中で、学生スタッフを始め、多くの人と知り合いになれることも、学習者にとって教室に来る楽しみの一つになっていることが分かった。学習者から「職場では日本人はあまり親切でないと感じていたが、日本語教室に来て日本人に対する考え方を改めた」という感想も聞かれ、主催者側が日本語教室の役割を再認識する場面もあった。
- ・日本語を学ぶ学習者の側だけでなく、その指導にあたる学生の側の学びも大きい。活動に係わる前は、外国人は外の人として捉え話をすることも考えなかったが、活動の中で学習者の生活の実態を知り、またやさしい日本語を使うなどコミュニケーションのとり方等についての知識も得て、いろいろな国の人と話すことに積極的になれたという感想も聞かれた。

【子どもクラス】

- ・乳児クラスと子どもクラスを分けることで、子どもクラスは、落ち着いて学習できる雰囲気を作ることができた。
- ・子どもの数が増えたことで、年齢や日本語レベル等によってグループ分けをして指導することが可能になり、教材の準備等も容易になった。
- ・ドリル等の学習教材だけでなく、遊びながら学習できるゲームやおもちゃなども購入し、子どもをあきさせないで指導することができた。

（2）交流イベントの開催

- ・それぞれのイベントは外国人同士の情報交換の場にもなり、また日本人と外国人の学習者の方々との交流の場ともなった。
- ・授業の雰囲気とは違った中で、学習者とスタッフ間で会話が弾み、土曜日の日本語教室の円滑な授業運びにも結びついた。
- ・シュラスコパーティーではブラジルの食文化の体験を、新年パーティーでは日本の伝統文化体験をと文化交流の面でも効果があった。

- (3) ボランティア研修会の開催
- ・ボランティア研修会を開催したことで、日ごろ日本語を教える中で疑問に思っていた数々の事柄について、講師からの的確な助言を受け、その後の支援活動に活かすことができた。
 - ・指導書や先輩の授業等を見ることで形だけを整えて実施していた授業についても、その意味を問うよう講師から助言され、授業に対する態度を見直すことができた。

4 事業の特質（工夫した点など）

- (1) 学習者の募集について、特にブラジル人に対しては、ポルトガル語で発行されている雑誌に情報を載せることの効果が大きいことが確認された。

しかし、多数からの問い合わせに対応するためには、対応の体制も整えなければならない。これまでは、ポルトガル語の話せる日系人の方の協力を得て、全て電話で対応をしてきたが、来年度からは大学のホームページなどを活用して、説明、受付などを行う予定である。

- (2) 多数の学習希望者に対応するために、日本語のレベルを測ってクラス配置を決めるためのプレースメントテストの方法を改良し、経験の浅い指導者でも出来るよう工夫をした。
- (3) 子どもクラスに「赤ちゃんクラス」を設け、保育士の資格を持つ方に協力をお願いして、乳児も預かる体制を作った。この保育の体制は学習者から歓迎されて、わざわざ浜松から通う学習者も現れたが、学生主体の活動では継続的な実施が難しく、今後については検討が必要と考えている。

5 今後の課題等

現在の問題点として、学習者の在籍者数は増えたものの、実際に日本語教室に来る学習者数に週によってかなりのばらつきがあることが挙げられる。そのため、学習者の定着を促進することが課題である。今後は継続して日本語学習をつづけてもらえるようさらなる工夫が必要だと思ふ。その工夫の一つとして考えられるのは学習者のニーズへの対応である。話せてもひらがな・カタカナの読み書きができずに不便を感じていたり、日本語能力試験の受験を目指していたりと学習者は様々なニーズを抱えている。その全てに心えることは難しくとも、教科書に沿った授業だけでなく、ニーズに対応できるよう、勉強会を開いて学生側の授業力を向上させたり、スタッフを増やしたりする必要があると考えられる。

また、今後は教員養成課程の学生に対する広報活動を積極的にやっていきたいと考えている。現在多くの外国人児童生徒が日本の小学校・中学校・高校に在籍しており、将来教員になる学生の方々に外国人児童生徒について感心を持ち、理解を深めてもらうことは大きな課題である。そのため、より

多文化共生社会づくり推進事業（AUE親子日本語教室）

いっそうわたし かつどう じょうほう ほうしん すたっふ かい
一層私たちの活動についての情報を発信していくとともに、スタッフとして
おやこにほんごきょうしつ さんか きょういんようせい がくせい つの おもう
親子日本語教室に参加してくれる教員養成の学生を募っていきたいと思う。